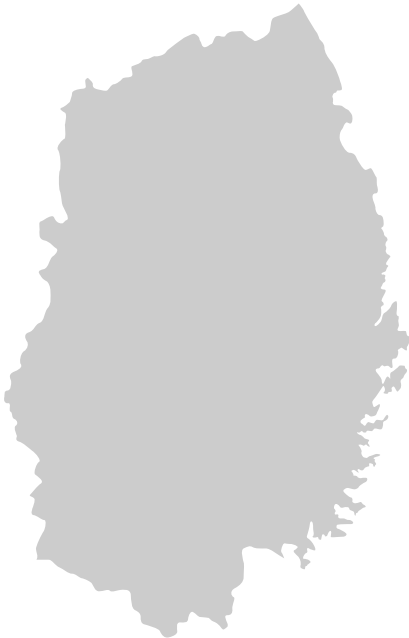




い わ て 復 興 偉 人 伝

～忘るまじ、郷土の誇り～



2011年3月11日、未曾有の巨大地震が東日本を襲いました。太平洋岸地域は津波により甚大な被害を受け、今なお懸命の復興作業が行われています。

岩手県は、これまでも地震や津波、台風など、幾度となく天災に見舞われ大きな被害を受けてきました。今回の震災の記録を歴史として後世に伝えていくことは、私たちにとって重要な使命です。なぜなら、過去の記録の積み重ねの中からは、先人たちが、いかにして困難を乗り越えてきたかをうかがい知ることができるからです。

「復興」という現実に直面する今、先人たちが災害に際して発揮した知恵と行動力、そして強い想いは、現代に生きる私たちに大きな示唆と勇気を与えてくれます。



医療奉仕活動に尽力した県会議員

おいかわ さかえ
及川 栄

[1857-1932]

江刺郡選出県会議員の及川栄は、日本赤十字社正社員の医師でもありました。1896年（明治29）6月17日の朝、及川は新聞によって津波が沿岸地域を襲ったことを知ります。6月15日の明治三陸大津波です。及川は、医師としての職分を尽くすべく現地に向かうことを決意します。すぐさま自分の病院にある薬や包帯、器械などを用意し、役所や近村の医者にも救援をよびかけ、被災地に向かって馬を走らせました。

6月19日の午前9時に盛町（現大船渡市）に到着すると、及川は郡長や警察と相談して、特に被害の大きかった綾里村（現大船渡市）でお寺に病室を設けるなどして診療に当たりました。治療は連日午後12時まで及び、後から派遣された軍医たちとともに一ヶ月以上にわたって治療活動を続けていましたが、7月27日より臨時県会開催の通知を受け、及川は村を離れることになりました。患者たちや治療団に加わった人たちは、及川の献身的行為に涙を流して送別しました。

後日、及川には赤十字支部から日当旅費が支給されましたが、「たとえわずかであっても、雨露の苦難から彼らを守ることに使って欲しいと思うのみである」といって、これを受け取りませんでした。

この40余日の救援活動は、及川自らが成した『海嘯地出張日誌』に、詳細が記録されています。

〔参考文献〕

『郷土物語』（佐藤孝一 著／佐藤孝一／1986）

『岩手の先人 第3集』（日本教育会岩手県支部／2003）

『江刺市史 第5巻 資料編〔「海嘯地出張日誌」収録〕』（江刺市／1979）

震災後の母子救済に手を差し伸べた

けむやま や え こ
 煙山 八重子

[1881-1955]

弁護士・国会議員である伊東圭介の次女として生まれた八重子は、盛岡女学校（現盛岡白百合学園高校）卒業後、明治女学校普通科を経て、母校盛岡女学校などで教鞭をとっていました。夫である煙山専太郎は、早稲田大学史学科充実の功労者として知られています。

1923年（大正12）9月1日、関東一円に甚大な被害をもたらした関東大震災が発生。八重子が住んでいた地域はほとんど被害を受けませんでした。下町を中心とした地域の惨状は目を覆うばかりのものでした。配偶者や帰る場所を失い、子どもに与えるミルクもなく困り果てた母親たちの姿を目の当たりにした八重子は、「何か私たちにできることはないか」と、友人の新渡戸コト（新渡戸稲造の養女）、塚原ハマ（盛岡女学校の同窓生）らとともに立ち上がります。3人は基金づくりに奔走し、内務省、東京市、大震災善後会からの援助を得て、東京巢鴨上富士町に20畳ほどのバラック建ての母子寮「愛の家」を設立し、被災した母子たちを救護しました。また、単に被災婦人を救護するだけにとどまらず、平時であっても扶養者を失った母子の生活の安全と向上を計ることが必要であると考えた八重子は、託児所、授産および職業相談なども行い、日本における母子生活支援施設の礎を築きました。「愛の家」の活動は、公的な団体からの支援ばかりでなく、個人寄付やボランティア、友人たちの協力、そして夫・専太郎の理解により支えられました。

〔参考文献〕

『煙山専太郎 愛と先見の人』（千葉瑞夫 著／岩手日報社／1985）

『生きて、耀いて』（熊谷佳枝 著／杜陵高速印刷株式会社出版部／1998）

『社会事業に生きた女性たち 続々』（五味百合子 著／ドメス出版／1985）



関東大震災後の東京復興に尽力

ごとう しんぺい
後藤 新平

[1857-1929]

胆沢郡塩釜村（現奥州市水沢区）出身の後藤新平は、須賀川医学校卒業後、内務省衛生局・台湾民政局長・初代満鉄総裁・鉄道院総裁・東京市長などを歴任し、数多くの分野で業績を残しています。関東大震災後の復興にまつわるエピソードは、東日本大震災以後、多くの新聞・雑誌で取り上げられました。

1923年（大正12）9月1日、関東大震災が発生。被害は1府6県に及び、被災者340万人、死者・負傷者・行方不明者あわせて15万人以上にものぼる大災害でした。焼け野原と化した東京を目の当たりにした後藤は、すべての行きがかりを投げ打って入閣し、東京復興の大役を担うことを決心します。

この震災を理想的新都建設の好機と考えた後藤は、「復興は単に一都市の問題ではなく、日本の発展、国民生活の根本問題」、「地震は何度もくる。今後、大きな被害を出さないため、公園と道路をつくる」との信念に基づき、復興に関する国・自治体の権限全てを集約した特設機関・帝都復興省の設立や、41億円復興計画などを立案しました。復興省案は閣議で否決されましたが、妥協案として他省と同格の帝都復興院が設立されることとなり、後藤は内相兼復興院総裁となります。予算も大蔵省との折衝の過程で徐々に縮小し、最終的に6億円余りの復興計画に落ち着きましたが、大正11年の一般会計予算が約14億円だったことを考えると、この計画がどれほど破格のものであったかが分ります。

〔参考文献〕

『後藤新平（週刊日本の100人72）』（デアゴスティーニ・ジャパン／2007）

『正伝・後藤新平 8』（鶴見祐輔 著／藤原書店／2006）

『都市デザイン』（後藤新平歿八十周年記念事業実行委員会 編／藤原書店／2010）

罹災者の救護医療に活躍

しば たくじ
柴 琢治

[1865-1947]

柴琢治は、気仙郡唐丹村（現釜石市）の医師である鈴木三折の次男として生まれました。少年時代は地域で一番の暴れん坊でしたが、1877年（明治10）頃に上京して警視庁巡查となり、その後、大阪で検事の書生として法律を学びました。1890年（明治23）父の訃報に接し帰郷した琢治は、医師である兄の助手をしながら医術を学び、1892年（明治25）に限地開業（医師のいない地域限定の開業）を許されました。

1896年（明治29）6月15日の晩、津波が村を襲い、釜石地方は大きな被害を受けました。琢治は自宅を開放してけが人を收容し、救援の医師たちが駆けつけるまで不眠不休で手当を続け、村の救済復旧のために奔走しました。1898年（明治31）4月、唐丹村議会の満場一致をもって村長に任命された琢治は、早速村の復興に取り掛かり、小学校・村役場の再建、宅地造成と住宅建設の助成、道路改修工事などを計画します。村の指導者たちが復興費用の捻出に頭を悩ませていたところ、琢治は村有林の立木売却を提案し、自分の全責任で村の財政再建にあたと豪語しました。実際は村有林に隣接する帝室御用林の盗伐が狙いであり、後に琢治に司直の手が迫ります。しかし、盗伐の発端が被災地復興のための窮余の行為であったこと、また、売却に際して私利私欲が存在しないこと、何より村民の琢治に対する思いから、裁判所側の心証も同情的となり、ついに証拠不十分として釈放されました。

〔参考文献〕

『五葉の怪傑』（荒木田椿堂 著／荒木田忠太郎／1952）

『風雪に舞う』（菊池弘 著／岩手東海新聞社／1994）



津波防災の町・田老の礎を築いた

せきぐち まつたろう
関口 松太郎

[1862-1937]

花輪村（現宮古市）出身の関口松太郎は、1883年（明治16）に長沢村（現宮古市）役場に勤めて以来、兵役をはさみつつも、長年の行政経験を経て、1925年（大正14）に田老村長となりました。この間、郡役所職員として、1896年（明治29）の明治三陸津波、1904年（明治37）の宮古大火など、数々の災害を経験しています。

1933年（昭和8）3月3日、田老村を最大波高10メートルの津波が襲います。多くの命が奪われ、家屋や漁船も大きな被害を受けましたが、関口が手早く県知事・下閉伊支庁長に救援を要請したため、救援の手は当日のうちに届きました。翌日、村会議員に非常召集がかけられ、その年の秋までには、防波堤の建造や避難道路の整備、区画整理などを含む災害復旧工事計画が立てられました。国や県は多額の費用を要する防波堤建造には冷淡で、集落全体の高所移転を復興策の基本と考えていましたが、翌年3月、田老村は村費を投じ、単独で防波堤の建造に取りかかります。復興工事視察のために県知事が来村した際、関口の復興にかける情熱と、村民の強い防災意識とが当局の理解を生み、最終的には村・県・国の三者が一体となり、防波堤の建造に取り組むこととなりました。関口は志半ばにしてこの世を去りましたが、その意志は代々の首長に引き継がれ、高さ10メートル、総延長約2.5キロメートルの防波堤が、「津波防災の町」のシンボルとして築かれました。

〔参考文献〕

『岩手の先人 第4集』（日本教育会岩手県支部／2006）

『田老町史 津波編』（田老町教育委員会／2005）

『ふるさと田老人物伝』（田老町教育委員会／1992）



後世の村を救った村長

わむら こうとく
和村 幸得

[1909-1997]

普代村出身の和村幸得は、1947年（昭和22）4月に38歳で当選をはたしてから、10期40年間にわたって普代村の村長を務めました。自身も昭和8年の昭和三陸津波を経験し、過去の大津波で多数の死者が出たことを教訓に、県営事業として12年もの年月と総工費35億6千万円をかけ、1984年（昭和59）3月に普代水門（総延長205メートル、高さ15.5メートル）を完成させました。「防災事業よりも集団家屋移転の方が経済的ではないか」という考え方もあったなか、土地の有効利用、生活環境の整備を計画的に推進することができるという効果の大きさなどから、着工を決定したといわれています。この普代水門と、太田名部防潮堤（総延長155メートル）は、2011年（平成23）3月11日の地震により発生した大津波から集落と村民の命を守り、被害を最小限に食い止めたとして注目されました。

1987（昭和62）年4月30日、任期満了退任に際して和村は、「村民のためと確信を持って始めた仕事は、反対があっても説得してやり遂げてください。最後には理解してもらえる。これが私の置き土産の言葉です」との言葉を残しており、名誉村民第1号に選ばれています。

〔参考文献〕

『貧乏との戦い四十年』（和村幸得 著／和村幸得／1988）

『広報ふだい 縮刷版2（昭和62年5月号）』（普代村／1993）

『広報ふだい No. 586（平成23年3月号）』（普代村／2011）

新聞記事「普代守った巨大水門 被害を最小限に」（岩手日報 2011.4.24 24面）



明治三陸大津波の被害を精緻に記録

やまな そうしん
山奈 宗真

[1847-1909]

陸前国横田村(現遠野市)に生まれた山奈宗真は、幼い頃から武士としての素養に加え、剣道・砲術・和算・地理・測量・開墾・植林を学んでいました。維新後は、牛馬の育成や養蚕を研究し、製糸場・私設農業試験所の開設や、当時全国唯一の私立図書館とされた信成書籍館の設置にも尽力しています。1896年(明治29)6月15日、三陸沿岸を大津波が襲います。津波により町がなくなっただけでなく、その後次々と判明する凄惨な状況に人々は驚愕します。この報せを聞いた山奈は、被害を受けた沿岸の産業を強く案じ、津波調査員として働きたいと県に願い出ました。このとき山奈は49歳、殖産興業の指導者・起業家として多忙な日々を送っていました。

山奈が自ら巡回に出ることを決意したのは、この調査が水産業の浮沈、さらには沿岸と中央部を結んでの産業経済振興に関わる一大事と認識したからです。復興につながる糸口を見出そうと、気仙村(現陸前高田市)から種市村(現洋野町)まで、総延長700kmに及ぶ複雑な海岸線を単身徒歩で踏査し、一人の死者も一戸の流失家屋もゆるがせにせず記録し、全集落を調査し終えるまで実に40日間を要しました。海嘯誌編纂資料収集事務の囑託として記録をまとめた山奈は、1903年(明治36)に「岩手県沿岸大海嘯取調書」など7点を帝国図書館(現国立国会図書館)に寄贈しています。

[参考文献]

『津波をみた男』 (大船渡市立博物館/1997)

『哀史三陸大津波』 (山下文男 著/青磁社/1982)

『三陸大海嘯岩手県沿岸被害取調表』 (山奈宗真/1896)

『山奈宗真 遠野の生んだ先覚者』 (田面木貞夫 著/遠野市教育文化振興財団/1986)



科学者の目で震災に向き合う

たなかだて あいきつ
田中館 愛橘

[1856-1952]

二戸郡福岡町（現二戸市）に生まれた田中館愛橘は、地球物理学や航空学など幅広い分野に業績を残し、日本の物理学の草分けとなった人物です。また、国際連盟知的協力委員として海外でも精力的に活動し、メートル法やローマ字の普及に努めたことでも知られています。

1891年（明治24）10月28日、愛知・岐阜両県を中心とした直下型地震「濃尾地震」が発生。死傷者2万4千余人、全半壊家屋24万余棟という甚大な被害をもたらしました。この年の7月にイギリス留学から帰朝し帝国大学理科大学教授に任ぜられていた愛橘は、文部省の命を受け、11月12日に震源地調査に入ります。この時に発見されたのが根尾谷大断層です。測量から戻った愛橘は、「地震そのものに対しては何とも致しようがないとしても、それから生ずる災害は、これを軽減する予防策を研究するのは国家として大切なことであるから適当な研究機関を創立したいものだ」として、菊池大麓（当時理科大学長）とともに帝国議会に建議案を提出します。その結果、1892年（明治25）、観測に基づく研究に加え、理論的・実験的研究など地震を専門的に研究する世界初の組織、「震災予防調査会」が設置されることとなりました。愛橘は調査会委員として全国の地磁気観測を行うとともに、地震や火山噴火の際に即刻現場に出向く、「馳付け委員」として、駒ヶ岳（北海道）や吾妻山（福島）の噴火、庄内地震などの調査に足を運んでいます。

〔参考文献〕

『田中館愛橘先生』（中村清二 著／田中館愛橘会／1988）

『雲神 田中館愛橘博士』（田中館申一郎 著／みちのく社／1973）

『田中館資料 第1集 辞令書等で見える田中館愛橘博士の足跡』（二戸市歴史民俗資料館／1993）

高田松原を育てた先人たち

かんの もくのすけ まつざか しんうえもん
菅野 柰之助 / **松坂 新右衛門**
 [1617-1671] [1672-1754]

東北地方太平洋沖地震※にともなう大津波により、国指定の名勝でもある高田松原は壊滅的な被害を受けました。背後に控えていた防潮堤さえも押し流されてしまいましたが、一本の松が奇跡的に生き残りました。

松原が広がっていた地域は、旧高田村と旧今泉村にまたがっており、もともとは木一本ない砂原で、潮風が巻き上げる砂塵と高潮とにさらされ、背後にある農地は収穫のない年もしばしばという有様でした。この状況を改善しようと立ち上がったのが、菅野柰之助と松坂新右衛門です。柰之助は高田村出身の豪農で、奉行の命令により防風・防潮のための松植林を行いました。後に私財を投じて植林を行っています。柰之助は松林の成長を見ることなくこの世を去りますが、彼の遺志を継いだ子孫の手により、数十年かけて松林が整備されました。新右衛門は仙台藩山田村に生まれ、長じて今泉村の松坂家に入婿しました。彼もまた、新田開発のために多額の私財を投じて松の植林を行っています。このように、先人の努力により白砂青松の景勝地となった高田松原ですが、過去幾度となく津波の被害を受け、壊滅の危機に瀕しています。そして、その度に松が植えられてきました。今は一本だけしかない松ですが、先人の遺志を継ぐ人たちの手により松が植えられ、いつかきっと、私たちの子孫の目を愉しませてくれることでしょう。

※気象庁命名。地震及びこれに伴う原子力発電所事故による災害を「東日本大震災」と呼称。

〔参考文献〕

『陸前高田の石碑』（宗宮参治郎 著／宗宮参治郎／1994）

『高田松原ものがたり』（陸前高田ロータリークラブ／2007）

新聞記事「先祖の遺産「奇跡の一本松」と対面 大阪在住松坂さん」（東海新報 2011.5.18 4面）



古記録にみる大地震

じょうがんじしん

貞観地震と東日本大震災

西暦 869 年（貞観 11）5 月 26 日、三陸沖で巨大な地震が発生しました。この時の記録が、平安時代に編まれた歴史書『日本三代実録』に残されています。貞観地震は今回の東日本大震災と比較されることが多く、震災以後、度々誌面で取り上げられています。過去の災害の記録を知ることは、我々が今後どのような防災計画を立てていくべきかを示唆してくれます。

五月廿六日癸未。陸奥國地大震動。流光如晝隱映。頃之。人民叫呼。伏不能起。或屋仆壓死。或地裂埋殮。馬牛駭奔。或相昇踏。城郭倉庫。門櫓墻壁。頽落顛覆。不知其數。海口哮吼。聲似雷霆。驚濤涌潮。浜洄漲長。忽至城下。去海數十百里。浩々不弁其涯涘。原野道路。惣為滄溟。乗船不遑。登山難及。溺死者千許。資産苗稼。殆無子遺焉。

5 月 25 日癸未、陸奥国、地大いに震動す。流光、昼の如く陰を映す。しばらくして、人民叫呼し、伏して起つこと能わず。或いは屋倒るに圧死し、或いは地裂けるに埋もれてたおれる。馬牛、驚きてはしり、或いは相昇りて踏みつぶす。城郭・倉庫・門櫓・垣壁、くずれ落ち顛覆すること、その数を知らず。海口の咆哮する声、雷霆に似たり。驚濤涌く潮、浜洄し漲長して、たちまち城下に至る。海を去る数十百里、浩々としてその涯涘をしらず。原野・道路、すべてを滄溟と為す。船に乗るいとまあらず、山に登るも及び難く、溺死する者千ばかり。資産・苗稼あやういかな子遺無きを。

【墻壁（しょうへき）】まわりを囲うかべ。

【雷霆（らいてい）】雷のひびき。

【浜洄（そかい）】さかのぼる。逆流する。

【滄溟（そうめい）】青々とした広い海。

【涯涘（がいし）】水ぎわ。はて。

【子遺（けつゐ）】のこり。余り。

原文：『国史大系 第 4 巻』（吉川弘文館／1966） 読み下し文：『日本の歴史地震史料 拾遺三』（宇佐美龍夫／2005）

〔参考文献〕

『科学 第 81 巻 第 5 号』（島崎邦彦「超巨大地震、貞観の地震と長期評価」）

『中央公論 2011. 6 月号』（寒川 旭「地震の歴史を生かした災害対策を」）

『地理 2011. 6』（杉戸信彦「貞観津波の規模は？」）





いわて復興偉人伝

～忘るまじ、郷土の誇り～

2011年7月

発行：岩手県立図書館指定管理者
〒020-0045 盛岡市盛岡駅西通 1-7-1
TEL 019(606)1730 FAX 019(606)1731

